

社長といきなり新婚生活!?

Saori & Chibiro

立花実咲

Miwaki Tachibana

eternity



エタニティ文庫

目次

社長といきなり新婚生活!?

5

書き下ろし番外編

どれだけ甘やかしても足りない

339

社長といきなり新婚生活!?

1 結婚という名の契約

（こんな大切な日に寝坊するなんて。私のバカ……！）
 月曜日の朝、細谷紗織は息を切らして走っていた。満開の桜に見惚れる余裕もない。
 今日には新ブランドコレクションを決める大事なブレゼンの日だ。一ヶ月前からコツコツとデザイン案とコンセプト資料を用意して、準備は万端だった。

それなのに、睡眠不足がたたって遅刻などしては、本末転倒にも程がある。

紗織は腕時計を確認しながら、急いでオフィスの自動ドアをすり抜けた。

（始業時間まであと五分……）

閉まりそうになったエレベーターにぎりぎり乗り込み、焦れたように階数表示を見つめる。

紗織が動めるアパレル会社『ロワゾ・インターナショナル』のデザイン部は、オフィスの十二階だ。

（……九、十、十一……十二！）

エレベーターが開いたと同時に走りだし、デザイン部へ駆け込む。なんとか朝礼がはじまる前に到着できて、紗織は安堵のため息をこぼした。

はあ、はあと乱れる息と、汗で額に張り付いた髪を整える。

「紗織、おはよう」

振り返ると、同期で親友でもある木島澄玲が笑顔で近づいてきた。

「澄玲ちゃん、おはよう」

挨拶した紗織の顔を、澄玲は驚いたように覗き込んでくる。

「すごい汗。もしかして走ってきたの？」

「うん。寝坊して焦っちゃった。間に合ってよかったよ」

紗織は眼鏡を取って、流れる汗をハンカチで拭いた。

「それは朝からお疲れ様。また遅くまでDVDでも観てたの？ 目の下のクマ、すごいわよ。あんた、行き詰まると、夜通しDVD鑑賞しだすもんねえ」

そういう澄玲も、ふあと小さく欠伸を噛み殺している。きっと彼女も徹夜でコンペの用意をしていたのだろう。

「彼氏とお泊まりで寝不足……っていう色っぽい理由じゃないところが、残念よね」
 からかうように言って笑う澄玲に、紗織は肩を竦めてみせる。

そのとき、紗織はふと澄玲のストッキングが伝線していることに気づいた。

「澄玲ちゃん、ストッキング伝線してるよ」

「うそ。やだ……いつの間に」

身体を捻^{ひね}って伝線したところを確認し、澄玲が顔をしかめる。

「私、替えを持つてるから使つて」

紗織は自分のバッグの中からストッキングの替えを取り出し、澄玲に差し出す。

「ありがとう紗織。助かるよ」

「いえいえ。どういたしまして」

にっこりと紗織は笑みを浮かべた。その表情を眺めて、澄玲がうーんと唸^{うな}る。

「何？ 人の顔をじっと見たりして。あ、どこかおかしい？」

紗織は思わず頬に手を当てた。

「あんた、この間、叱られて泣いてる新入社員の女子にハンカチ貸してあげてたわよね。徹夜明けの男子にはお弁当わけてあげたり、風邪引いて咳き込んでる上司に飴あげたり……。世の男どもは、どうしてあんたの魅力に気づかないかなあ」

「澄玲ちゃんったら。もう、いいから、行つておいでよ」

澄玲は、紗織に彼氏ができないことをいつも心配してくれる。紗織は単に、困つてい

る人を放つておけない性質^{たち}というだけなのだが。

アパレル会社に勤めていても、ファッションもヘアメイクも普通だし、とりたてて美人というわけでもない。澄玲は紗織がモテないはずはないと言ってくれるが、二十七歳になるまで誰とも付き合つたことはなかった。でも寂しいと思つたことはない。それよりも、紗織にはずっと大切なことがあつたから。

憧れつづけたキラキラふわふわした服を、誰かのために作る——ファッションデザイナー^ナとして誇れる自分になりたい。

そう思つて六年。だが、いまだ自分が手掛けたブランドにヒットはなかつた。このところ任される仕事は、他のデザイナーの補佐や細々^{こまごま}した作業ばかり。

誰でも夢は見られる。けれど、デザイナーとしての才能やセンスは、どんなに努力したところでどうにもならないのだ。

紗織はそれを、入社六年目にして痛感していた。けれど、そう簡単に諦められる夢でもない。だからこそ紗織は、今日のプレゼンに懸けていた。

朝礼が終わつたあと、紗織は同僚と一緒にプレゼンを行う会議室の準備に取りかかる。

「細谷さん、そつちに資料を置いてくれる？」

「了解」

長テーブルに足りない椅子を追加し、一冊ずつ資料を置いて、プロジェクトの調整をした。

「なんか緊張してきたな……」

紗織が咬くと、手伝いをしていた子も領いた。

「プレゼンは何度やっても緊張するよね」

「緊張して内容が飛んじやいそうだから、始まる前におさらいしておこうかな」

準備を終えた紗織は「じゃあ、あとでね」と同僚に断って、自分のデスクに向かう。

「細谷さん、ちよつといいかな？」

会議室を出てすぐの廊下で部長に声をかけられた。

「はい。なんででしょうか」

「悪いんだが、これからすぐ、『ロワゾ・ブルー』のオフィスに行ってもらいたい」

「……え？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

ロワゾ・ブルーというのは、紗織の勤めるロワゾ・インターナショナルの子会社だ。

新人デザイナーの育成の場としてロワゾ・ブルーが設立されたのは、今から三年前。

だが、親会社であるロワゾ・インターナショナルのデザイナーたちの間では、ロワゾ・

ブルーは使い捨ての実験場所だとか、社員の左遷場所だとかいう黒い噂が立っていた。

（私が、ロワゾ・ブルーに……？ それって、どういうこと？）

「で、ですが私は、これからプレゼンが……」

「あ……詳しいことは、あちらの社長が直々に説明されるそうさ。君は会議には出ず、

すぐに向かってほしい」

「待ってください。部長……」

紗織は震える声で、とっさに部長を引き止める。

「すまないが、僕はこれからやる必要があるから。じゃあ頼んだよ」

説明を避けるように、部長はそそくさと踵を返した。紗織は廊下に立ち尽くし、去っ

て行く部長の背中をただ見送る。

「ねえ、細谷さん、もしかして……」

「……だよな」

茫然とする紗織の周りで、社員がひそひそと噂話をはじめた。ちらちらと向けられる

好奇の視線が、紗織の不安を煽る。

よそよそしい部長の態度と突きつけられた言葉が、頭に焼きついて離れない。

もう自分には、プレゼンに参加する資格さえないと言うのだろうか。

頭の中がネガティブな思考に占領されそうになり、紗織はぶんと頭を振った。

わからないことをうだうだ考えていても仕方ない。とにかく言われたとおり、ロワ

ゾ・ブルーに行かなくちゃ。紗織は急いでデスクに戻り、荷物を持ってオフィスを出了た。

紗織は、小さな頃からシヨップに置かれているファッションカタログが大好きだった。いつか大人になったら、カタログに載っている女の子のように綺麗な服を着て、絵本のお姫様みたいに王子様に見つけてもらえたら……などとロマンチックなことを夢見ていた。

けれど、夢と現実とは違う。小さな繊維会社を営む細谷家の暮らしは貧しく、夢見たような綺麗な服を着ることはできなかった。

そんな紗織の中学時代のあだ名は『地味子』。しかし、彼女の夢は形を変えてつづいていく。高校に入学した紗織は被服部に入学し、作り手を目指すことにした。

真っ白なキャンバスに、思いのままデザインを描いていく。

ドレスじゃなくたって、ワンピースにスワロフスキーやビーズをつけて、細かいレースを飾ったらどうだろう。ガラスの靴がなくなると、爪にかわいいペディキュアを塗ったらいいじゃない？

アイデアは尽きず、どんどん膨らんでいった。そして、気づいたのだ。お姫様になるより、こっちの方がずっと素敵だ、と。

誰かを笑顔にするために、キラキラふわふわした服を作りたい。

紗織はファッションデザイナーを目指して、四年制の専門学校に入学した。その後、運よくアシスタントをしていた大手アパレル会社ロワゾ・インターナショナルに入社。

三年間の下積みを経て、ようやくファッションデザイナーを名乗ることができた。だが、未だに結果を出せていない。

『地味子』からファッションデザイナーになった細谷紗織は、今なお地味に、夢と現実の狭間でもがいていた。

会社を出た紗織は電車に乗り、隣駅で降りる。そこから、地図を頼りに歩いて十分にらいでロワゾ・ブルーの入る大きなビルに着いた。

無意識に、はあ……と重いため息がこぼれる。

重い足を動かし受付で親会社から来たことを告げると、すぐに社長室に案内された。重厚な扉の前に立ち、紗織は緊張で身を固くする。

(用件はなんだろう。体のいい自主退職を勧められたりして……)

胃がきゅうつと引き攣れ、息が詰まりそうになる。

そんな紗織の前で、受付の女性がドアをノックした。

「失礼いたします。細谷様がいらっしゃいました」

一拍おいて、中から返事があった。受付の女性がドアを開け、笑顔で「どうぞ」と中へ促してくれる。そのまま戻ろうとする彼女を、心細さのあまり引き止めてしまいた

くなくなった。

一人残された紗織は、おそろおそろ社長が座っている方を見る。背後の窓から陽が射し込み、逆光で顔がよく見えない。

「ようこそ。デザイナーの細谷紗織さん？」

甘く響く低音に、紗織は弾かれたように返事をした。

「は、はい」

緊張で、今にも心臓が飛び出してきそうなほどの爆音を立てる。

陽が雲に覆われ、目の前に座っている社長の顔が見えてくる。思っていたよりずっと若い。おそらく三十にも届いていないだろう。驚くほど端正な顔立ちをしていた。

さらりと艶やかに流れ落ちる前髪の隙間から、寶石のように澄んだ目が見える。甘さの滲む涼し気な目で見つめられ、どきりと鼓動が高鳴った。

まるで獲物を捕らえんばかりの眼差しに紗織は戸惑う。しかし次の瞬間、社長はやりと表情を緩め、微笑を浮かべた。

「本年度からロワズ・ブルーの代表を務めさせてもらうことになった、水瀬千尋です。よろしく」

水瀬のやわらかな微笑みを見た瞬間、紗織は思わず息を呑んだ。

その笑顔には憶えがあった。けれど、どこで見たのか、すぐに思い出せない。わかる

のは、どこかで見たことがあるという漠然とした感覚だけ……

デスクに両手を組んで小首をかしげる彼は、一度会ったら忘れられない美形だと思うのだが。

思い出せずにモヤモヤしていると、「細谷さん？」と水瀬に声をかけられた。

「す、すみません。細谷紗織です。よろしくお願いします」

紗織がぎこちなく頭を下げると、水瀬は一拍おいて静かに口を開いた。

「さっそくだけど」

水瀬は手元の書類に目を落としつつ、こちらに視線を向ける。紗織は覚悟を決めて、ぎゅっとこぶしを握った。

「これより君には、ロワズ・ブルーのデザイン部に所属してもらいたい」

「……やっぱり」

無意識に肩を落とす紗織に、水瀬はつづけて言った。

「僕はロワズ・インターナショナルCEOの命令で、ロワズ・ブルーの業績をアップさせるため、パリ支社からここに呼ばれた。最初の仕事として、新規ブランドを立ち上げるつもりでいる。君には、そのデザイナーを任せたい」

「私に新規ブランドの立ち上げを……？」

「ああ、そうだ」

左遷という言葉を目に浮かべていた紗織にとって、水瀬の言葉は思いがけないものだった。

突然巡ってきた大きなチャンスに、紗織の表情が輝く。しかし、すぐに返事をしようとする紗織を制し、水瀬が椅子から立ち上がった。そのままデスクを回って紗織の目の前に立つ。

水瀬はかなり上背があるため、あまり背の高くない紗織は彼を見上げなくてはいけなかった。

「それからもうひとつ。これを君に」
 そう言って、一枚の用紙を差し出す。

(……え?)

意味がわからず、紗織は水瀬の顔を見る。渡されたのは『婚姻届』だった。

「君には僕と結婚してもらおう。明日までにそれに記入してきてほしい」

——何? 今、なんて言ったの?

紗織が唖然としてみると、婚姻届をトントンと叩かれた。

「聞こえなかった? 君は僕と結婚するんだ」

「け……結婚って……一体、どういう……ことでしょうか?」

紗織は婚姻届の用紙を握りしめ、なんとか口を開いた。疑問符ばかりが頭の中に浮か

び、まったく話についていけない。

(それに、彼の水瀬って苗字、ロワゾ・インターナショナルのCEOと同じ……)

「カムフラージュさ」

「カムフラージュ?」

「ああ。フランスから戻ってきてからというもの、ひっきりなしに見合い話や縁談が持ち込まれてね。正直うんざりしているんだ。だったらもう、身を固めてしまおうかと思ってる」

やっぱりそうだ。CEOの息子は、バリ支社にいと聞いたことがあった。

「だ、だからって、どうして相手が私なんですか。社長の結婚相手なら、私よりもっとふさわしい方がいらっしやるんじゃないですか?」

混乱しながらも、紗織は必死に言葉をぶつける。

「……君のご両親は繊維会社を経営しているそうだね?」

急に話題が変わり、紗織は相手を窺うように聞き返した。

「それが、どうかしたんですか?」

「その様子だと、君は何も知らされていないんだな。ご両親の会社は近年の不況で随分と業績が落ちているようだ。このままでは、あと数年もつかどうか……」

「えっ……そんな、嘘ですよね?」

両親の経営する繊維会社は、昔からいる職人さんを大切にすることで、小さいながらも優れた技術を評価されていたはずだ。そんなに業績が悪化しているなんて、紗織は一度だって聞いてない。

「残念ながら事実だ。このまま何もしなければ、ご両親の会社は潰れる。君の家族もちろん、従業員も路頭に迷うことになるだろうな」

水瀬は感情の見えない声で淡々と口にする。だからなのか、その内容はひどく現実味をもって紗織の頭に入ってきた。

「とはいえ、細谷繊維会社の技術の素晴らしさは業界でもよく知られている。倒産ということになって失うのは惜しい。そこで、だ。君さえよければ、細谷繊維会社の業績改善に向け援助をしてもいい」

混乱し言葉もなく立ち尽くす紗織を、水瀬の低く静かな声が現実引き戻す。

「ほ、本当ですか……!」

藁にもすがる思いで、紗織は目の前の水瀬を見上げた。

「ああ。その代わり、君には僕と結婚してもらうよ」

なんでもないことのように告げられ、紗織はその場で固まる。

「そんな……」

「この際だ。もうひとつ、はっきり言っておこう。君は親会社に不要な人間だと判断さ

れた」

言われた瞬間、紗織は息が止まるかと思った。親会社に不要な人間——彼の言葉が、じわじわ紗織の胸を圧迫してくる。

「僕の提案を拒絶すれば、明日から君は、デザイナーとしての道も断たれるということになるな」

急に目の前が真っ暗になった心地がして、婚姻届を持つ手が震えた。目の前に立つ整った顔の水瀬が、悪魔のように思えてくる。

彼は、自分と結婚さえすれば、紗織にデザイナーとして再びチャンスを与え、さらには両親の会社も助けてやると言っているのだ。

「誤解しないでほしいが、僕は君を奴隷のように扱おうってわけじゃない。カムフラージュである以上、周りから本当の夫婦だと思われなくちゃならないからね。逆に、仲良くしてもらわないと困るんだよ」

水瀬の手が紗織の顎をくいと上げる。仲良くと言いながら、紗織を見つめる彼の綺麗な目には、まるで温度を感じない。

「紗織……結婚したら、僕は夫としての義務を果たそう。だから、君にも僕の妻として努力してほしい」

「努力?」

「そう。妻として僕を愛する努力だ」

冷徹な表情のまま甘い声で囁かれ、紗織の中で何かが溢れた。自分の意思とは関係なく、次々と涙が頬を流れていく。

(泣いてる場合じゃない。わかっているのに……)

紗織は唇を噛みしめ涙を流す。すると水瀬は、長い指で紗織の目尻に溜まった涙を拭った。

「僕は君を泣かせたいわけじゃない。ただ、君の——どんな人も幸せにしてあげられるデザイナーになりたいという夢を、壊したくないと思ったんだ」

紗織は驚いて彼をまじまじと見つめ返す。

(どうしてこの人が、それを知っているの……!?)

紗織を見下ろす水瀬の表情が、ふっと和らぐ。懐かしそうに目を細め、静かに微笑んだ。

「顔を見ても思い出さないか？ もう十年以上経つからな」

小さく咳いた彼は、紗織の頬にすべった涙を指で払う。

「僕の以前の名は、藍沢という」

「藍沢……!」

その名前にハッとする。以前、彼に会ったことがあるような気がしたのは、やはり気

のせいじゃなかったのだ。

「うそ。千尋……くん、なの？」

信じられない思いで、紗織は目の前に立つ人を見つめる。

混乱と懐かしさと、しこりのように刻まれた苦い記憶が一度に湧き上がり、茫然と立ち尽くす。

高校の同級生である千尋とは、卒業以来一度も会うことはなかった。同じ部活で共にデザイナーの道を目指した彼とは、あることがきっかけで仲違いしそのままとなっていたのだ。再婚した母親と海外に行ってしまった彼とは、もう二度と会うことはないと思っていたのに……

紗織は、水瀬の中に懐かしい面影を探した。高校のときより輪郭がシャープになり、身体つきもすっかり大人になっている。けれど、改めて見ると、目元にあの頃の面影が残っていた。

しかし、かつての思い出に浸ろうとする紗織の思考をシャットダウンするように、千尋が口を開く。

「もう一度、言うよ」

微笑みを浮かべたまま、千尋が紗織の唇を指先でなぞった。

ぞくり、と甘美な感触が紗織の背筋を走っていく。

「これは契約だ。君は僕と結婚して、僕にふさわしい妻になるんだ。その代わり、僕は君にデザイナーとしてのチャンスと両親への援助を約束する」

やさしい笑みを浮かべながらとんでもないことを言ってくる千尋に、息を呑む。
 (彼は、本当に……あの千尋くんなの?)

こんなふうには、結婚を契約として告げてくれること自体、考えられないことだ。何か言おうと思うのに、衝撃と混乱で言葉が出てこない。

「なんだ。もしかして、チャンスを活かす自信がないのかい?」

紗織はハツとして千尋を見る。すると彼は、蔑むような眼差しを紗織に向けた。

「入社六年目の中堅デザイナーだが、ヒット商品はなし——君のことは調べさせてもらったよ。このままサポート係として埋もれるつもりか?」

「なっ!」

「君はあの頃と何も変わらないな。肝心なときに力を出さない……!」

失望した——そう千尋が言うのを察した紗織は、思わず声を荒らげる。

「そんなことありません! 私は必ず、デザイナーとして成功してみせます!」

衝動のままそう反論した紗織は、千尋の表情を見て身を強張らせた。

紗織を見つめる千尋は、満足げな笑みを浮かべている。

やられた。ここにきて、紗織はようやく千尋の意図を悟った。

「それなら、君の選ぶ答えはひとつだ。明日までに、それにサインと判子を押してきて」

千尋の言葉が、遠くに聞こえる。まんまと彼の挑発に乗せられ、自分で逃げ道をなくしてしまった。

(あんな啖呵を切っちゃって、どうするのよ私……)

じわじわと焦りが湧いてくる。でも、今さら引くに引けない。

内心で葛藤しながら言葉もなく立ち尽くしていると、ぐいっと左手を引かれた。身じろぐ間もなく薬指に冷たい金属の枷が嵌められる。

「あ……っ」

「これは契約の証《エンゲージ》だよ」

(まさか、もうこんなものまで用意していたなんて……)

左手を見つめて茫然とする紗織に、千尋は「これからの君に期待しているよ」と言っ
 て、残酷なまでに甘い微笑みを浮かべた。

「今日中に向こうから荷物を移動して、必要な引継ぎをしてほしい。人手が必要な手配するから連絡してくれ」

「……わかりました」

「話以上だ。歩ける? すごく震えているね。下まで送っていいこうか?」

「結構です。大丈夫……ですから」

「そう。じゃあ、これからよろしくね」

紗織は震える膝になんとか力を込めて、千尋に向かって頭を下げた。そのまま、くると踵を返してドアに向かう。

早く、早く、一刻も早く。この息苦しい状況から解放されたい。

社長室を出ると、紗織はへなへなとその場に頽れた。

さっきまでのことが頭の中をぐるぐると回っている。気持ちが悪くついでこない。これが夢なら、今すぐ覚めてほしかった。でも、これが現実であると知らしめるように、左手の薬指には、キラキラと眩しいダイヤモンドが輝いている。紗織はぎゅつと目を閉じ、きつく手を握った。

拒否したところでどうにもならない。今の自分には、この状況を打開する手立ては何もないのだから。

慌ただしく荷物の移動と引継ぎを済ませ、紗織は逃げるように本社を出た。その足で、実家へ向かう。社会人になってからは、盆と正月ぐらいしか実家には行かなくなっていたので、両親に会うのは正月以来、三ヶ月ぶりだ。正月に会ったときは、何も変わった

ことなどなさそうだったのに。それとも、娘には言えずにいただけなのだろうか。

(なんて言っただけで切り出そう……)

千尋の言うことを鵜呑みにせず、両親からきちんと話を聞かなくてはならないと思っただ。たとえ彼の言うとおりのだとしても、ちゃんと自分で真実を知っておきたい。

築三十年の古い家を前にして、インターフォンを押す指が震えた。すぐに母親の声が出て玄関のドアが開く。

「まあ、紗織。どうしたの、仕事帰り？」

母が、紗織の突然の訪問にびっくりした顔をする。

「うん。ちょっとお邪魔してもいいかな？ お父さんもいる？」

「ええ、いるわ。ちょうどこれから、夕飯なのよ。紗織もまだだったら、一緒に食べていきなさい」

「ありがとう。そうさせてもらうね」

母の後ろについて居間に入ると、父もまた驚き、すぐにうれしそうな顔をした。

「紗織、正月以来だな。元気にしていたかい？」

笑顔を取り繕い「うん」と答えると、母が今ご飯をよそうから、と台所に入っていく。

「仕事はどうだ？ 確か大事なコンペがあるとか言っていたよな」

紗織はテーブルを挟んで父と向かい合うように座り、手に持っていたバッグを足元に

置いた。

「うん。ぼちぼちやつてるよ。お父さんこそ、会社はどうなの？ 相変わらず？」

「うーん、まあ、このご時世だしな。色々あるさ。だが、おまえはうちのことは気にせず、自分のやりたいことを精一杯やりなさい」

父が穏やかにそう言っただけで、母の方を見る。母も同じように「ええ」と頷いた。

千尋とのことがなかったら、きっと父の言葉になんの疑問も持たなかったかもしれない。でも、ちゃんと事実を確かめたい。そう思いながら、紗織は覚悟を決めて、口を開いた。

「会社で、うちの業績が悪化しているという噂を聞いたの。お願い、本当のことを教えて」

両親は顔を見合わせ、父が「そうか……」とため息をつく。

「不況だから仕方ない。色々打てる手は打っているが、赤字になる一方だな」

父は手に持っていたビールグラスを置いて、物憂げに言った。

「どうして話してくれなかったの？」

まさかそんな大変だったなんて。今まで、家のことをちっとも考えてこなかった自分を反省する。二人の言葉に甘えて、学校に行かせてもらって好きな事をやらせてもらって……自分のことばかり考えていた。もっと気にかけるべきだったのに。

「親は子に心配をかけたくないものだよ」

父が見守るような視線を向けてきた。

「そうよ。紗織はうちのことは心配しなくていいの。紗織がやりたいことをがんばっているのが、私たちの喜びなんだから」

母が目を細めて紗織を見つめる。

「お母さん……」

「大丈夫。無事お前に結婚式を挙げさせるまで、がんばるさ」

父が自分を鼓舞するように力強く言う。母も笑みを浮かべた。

「紗織はどんな人と結婚するのかしらね？ あなたの将来が楽しみだわ」

——紗織は何も言えなかった。

一方的に持ちかけられた契約結婚。……自分勝手に腹は立つけれど、紗織にとって好条件なのだ、冷静になった今ならわかる。

「これは契約の証《エンゲージ》だよ」

千尋の甘い囁きが鼓膜に蘇ってくる。

——逃れられない。両親の会社を存続させるために、今の紗織にできるのは、千尋の提案を呑む事だけなのだ。

(私にはもう千尋くんと結婚するしか選択肢はない……っていうことなのね)

甘い言葉で誘惑し、やさしい声で懐に入り込む、悪魔のような人だ。いつか私だけの王子様が……と、無邪気に憧れていた幼い頃の自分。その夢はデザインになることへ形を変えていった。けれど、女である以上、それなりに結婚に夢を抱いていた。その夢が、黒く塗りつぶされていく。悪魔との契約は、もう、交わされてしまったのだから。

2 誓いのキスを君に

翌日、紗織はサインと捺印を済ませた婚姻届を携え、社長室に向かった。

昨晩はまったく眠れなかった。それでも一晩考えて、覚悟を決めた。深呼吸し、重厚な扉をノックする。すると、すぐに返事があった。

「——おはよう。覚悟は決まった？」

部屋に入るやいなや出迎えた千尋にそう聞かれる。思わず紗織は、むっとした。

こちらの気も知らず、千尋は朝からとても爽やかだ。端整な顔には余裕の色が浮かんでいる。

爆発しそうな気持ちを押し殺し、紗織は千尋へ歩み寄った。そして、昨日からずっと気になっていたことを尋ねる。

「どうして、ここまでしてくれるんですか？ あなたにだって、好きな人と結婚したいっていう気持ちはあるでしょう？ 相手は私じゃなくてもいいはずです」

冷静になって考えれば、わざわざ契約など結ばなくても千尋の相手となる女性はいくらでもいそぐ。どうして自分が選ばれたのか、その理由がわからない。

すると、千尋の瞳がふっと和らいだ。
 「あいにく、結婚したいと思うほど好きな女性はいなくてね。君を選んだのは、しいて言うなら昔のよしみかな」

「昔のよしみ……」

なぜか、胸にちくりと痛みが走った。

（それって、知らない相手より私の方が都合がよかつたってこと？）
 湧き上がるもやもやに、紗織は顔をしかめる。

「君の手にあるものを僕に渡して」

そんな紗織に構わず、千尋は婚姻届を取り上げた。

「婚姻届は、一緒に出しに行こうか？ それとも代理人に任せる？」

書面を確認しつつ、千尋が尋ねてくる。

「……契約、なんでしょう？ だったら、代理人に任せます」

紗織はそう言いながら、同時に心の中で自分自身に言い聞かせる。これは契約なのだ。
 だと。

「わかった。それじゃあ事務的な手続きは、すべてこちらに任せてもらうことにするよ。君にはこれを渡しておこう」

手のひらに冷たいカードキーを持たされる。

「これは……?」

「新居の鍵だよ。君は今週末までに、僕の家引越してできるよう準備を整えておいてほしい」

至極当然といった顔で言われて、紗織は目を見開いた。

「一緒に暮らす……って、本気で言っているんですか？ それも今週末から!？」

思わず頓狂な声が出た。まったくそのあたりは考えていなかった。てっきり婚姻届を出すだけの、形式だけの結婚だと思っていたのに。

何を今さら、と千尋は呆れたように笑みを浮かべる。

「夫婦になるんだから当然だろう？ それに、きちんと二人が夫婦として生活していなければカムフラージュの意味がないからね」

覚悟を決めたとはいえ、人の弱みにつけこんでどんどん話を進めて行く彼に腹が立つてきた。

「つまり、フリをしなければいいんですね。仲のいい夫婦を演じればいいんでしょう？」

紗織は苛立ちに任せて、しかめっ面のままそう問いかけた。

「言ったはずだ。結婚したら、僕は夫としての義務を果たすと」

そう言っ、千尋はいきなり身体を寄せる。

「だから君にも、一日も早く僕のことを好きになってもらわないと困る」

耳元で甘く囁かれ、紗織は顔が熱を持つのを感じた。きつと、赤くなっているに違いない。

「君と一緒に暮らすのを、楽しみにしているよ」
赤くなった紗織を見て、彼がうれしそうに頬を緩めた。これはたぶん、からかっているだけだ。思いどおりの反応を見せる紗織を、面白がっているのだろう。

ビジネスライクに契約と言ってみたり、好きになれと言ってみたり、千尋が何を考えられているかさっぱりわからない。

紗織はさつそく、自分のした選択を後悔しはじめた。苛立ちと戸惑いの入り混じった複雑な気持ちと、遠い記憶の中で味わった甘い痛みが緋い交ぜになり、紗織を惑わせる。「さて、と。ひとまず午前中は新しいデスクを片づけていってくれ。午後に改めて、デザイン部の部長から君をみんなに紹介してもらおうよ。それと、君の他にデザイナーをもう一人入れることにしたから。あとで紹介する」

「……わかりました」

「婚姻届が受理されたら、すぐにメールで知らせるよ」

去り際に言われて、紗織はただ頭を下げた。

(受理されたら、メールで知らせる、か……)

まるで他人事のようにだ。今もまだ、結婚するなんて実感が湧かない。けれど、現実逃

避けていても、何時間か後には、細谷紗織から水瀬紗織になるのだ。

(まさか、こんなふうには、千尋さんと結婚することになるなんて……)

社長室から出た紗織は、カードキーを握りしめ、思いっきりため息をついた。

昨日から紗織は、突きつけられた現実を受け入れるのに精一杯で、千尋との今後をちゃんと考えられてはいない。

紗織はエレベーターに乗って移動している間、高校で初めて彼と出会った日のことを思い浮かべた。

今から十二年前――

高校に入学したばかりの紗織は、すでに将来ファッションデザイナーになることを意識していた。部活を選ぶとき、被服部に入ろうと考えたが、自信がなくてなかなか入部に踏み出せないでいた。

そんなある日、新入部員勧誘のため被服部が展示していた作品に目を奪われる。思い思いに描かれた個性的なデザイン画には躍動感があり、紗織の創作意欲をかき立てた。感動しながら、ひとつひとつ展示を眺めていると、同じように目を輝かせてデザイン画を見ている男子に気がついた。

(わ、綺麗な男の子……)

綺麗な顔立ちをした中性的な印象の少年は、まるで童話の中から出てきた王子様みたいだと思った。ついじっと見つめていたら、不意に彼がこちらを見る。びっくりした紗織は慌てて俯いた。

「君もこれ見てたの?」

低音のやわらかい声が、頭の上からかけられる。紗織は、おずおずと顔を上げた。

彼は表情こそ硬いものの、興味津々といった様子で紗織の返答を待っている。

「う、うん。すごく好きだなんて。私もこういうデザインを描いたら素敵だなんて思っ
て見てたの」

緊張しながら、紗織は感じたまま声に出していた。

じっと自分を見ている彼の視線が恥ずかしくて、また俯く。

「きっと、作り手の『感情』がデザインを作るんだろ? うね。こうして作り手の想いがこもったデザインには、見る人の感情を引き出す力があると思うんだ」

紗織は驚いた。彼の言葉に、全身に電流が走ったような衝撃を受ける。

言葉もなく見つめていると、彼が微笑かに笑みを浮かべてこちらを向いた。

「そういうの作りたいって思わない?」
紗織はうれしくなって、こくこくと頷いた。

「うん。思う。思うよ! 私も着る人が幸せを感じられるような洋服を作りたいの!」

「じゃあ、また会えるかもね」

そう言って微笑むと、彼は背を向けて行ってしまふ。

また……ということ、彼もここに入部するつもりなのだろうか?

ほのかな期待と淡い想いを抱いて迎えた翌日、入部届を出しに行った紗織は、彼と再会した。

「あ」

ほぼ同時に、二人の声が重なる。

「被服部、入ることにしたんだ? よろしく」

「うん。こちらこそ、よろしくね!」

それが、紗織と藍沢千尋の出会いだった。

二人はそれから仲良くなり、感性を共有する『同志』から、互いに刺激しあう『好敵手』になっていった。

「コンクール通算勝利数は、千尋くんの勝ちかあ。次は絶対に負けないから」

「次も僕が勝つよ」

個人のコンクールでは競い合い、グループ発表では意見を出し合って最高にいいデザインを作り上げてきた。

(千尋くんも、私と同じ気持ちでいてくれたらいいな……)
胸に灯る彼へのあたたかな気持ちを大切にしながら、二年になっても『相棒』のような関係がずっとつづいていくものだと思っていた。

ところが、ある日を境に千尋は部活にあまり来なくなってしまうた。心配のあまり訪ねて行った紗織に、彼はぼつぼつと事情を話してくれた。両親が離婚し、彼は母親と二人で暮らすことになったらしい。だが、経済状況が芳しくない(えんは)ので、学校をやめなくてはならないかもしれないと言う。

それを聞いた紗織は、ショックで言葉を失った。

「心配かけてごめん。母親が別人みたいにヒステリックになったり涙もろくなったりするのには、僕だけ自由にしてるわけにもいかななくてさ……」

紗織はもどかしく思いながら彼の話(はなし)に耳を傾ける。彼のために何かしたいのに、なんの力もない自分を痛感した。

不意に、彼と出会った日のことを思い出す。

『感情』がデザインを作るのだと彼は言った。想いを込めたデザインが見る人の心を動かすのなら、彼の心を輝かせるようなデザインも描けるのではないか。

今まで不特定多数を意識したデザインしか作っていなかった紗織が、初めて特別な誰かのためにデザインをしようと思った。

「決めた。私、千尋くんが元気になるデザインを考えて、とびつきり幸せな衣装を作るよ」

勢い込んでそう伝える紗織に、千尋は少し照れくさそうにしながらもうれしそうな笑みを見せてくれた。

「ありがとな」

そう言っ、紗織の頭をくしゃりと撫で(な)でくれる。そんな彼が本当に大切だと思った。それからとかが経ち、高校二年の夏休み明けのこと。

進路調査票を提出した紗織に、担任を通して被服部の顧問から有名ファッション専門学校の推薦を受けてみないかと打診があった。将来デザイナーを目指す者にとって、何人も有名なプロを輩出している有名専門学校はどこより魅力的だった。なにより在学中からプロのアシスタントにつくことができるという利点がある。さらにこの推薦が通れば学費が免除されるらしい。

これまでのコンクールの実績を考慮して選ばれた候補者は二名……紗織と千尋だった。ただし、合格できるのは一人だけだという。

紗織はその話を聞いたとき、千尋の家庭の事情が頭をよぎった。

千尋は、高校をやめなくてはいけないかもしれないと言っていた。もし、推薦に受かれば、デザイナーとしての彼の未来を繋ぎ止めることができるかもしれない……そんな

思いが芽生えた。

「正々堂々と勝負して、互いに悔いを残さないようにしよう」

千尋はそう言って握手を求めてきた。もちろん紗織もそのつもりでいた。けれど、コンペ直前——ずっと胸に抱えていた、彼がいなくなってしまうという不安

が紗織の中で大きくなってしまったのだ。

そこで紗織は、コンペに出すために考えたAとBのデザイン案のうち、顧問が推して
くれているA案から急遽B案に替えた。

その結果、千尋のデザインが受賞し、彼は有名専門学校の推薦枠に入ることが決
まった。

だが彼は——

「どうして手を抜いたりした！ 君が作りたかったのは、こっちじゃないだろ」

そう言った千尋は、いきなり紗織のB案のデザイン画を破いた。

「ち、千尋くん、私は……っ」

紗織は誤解されたくなくて必死に説明をしようと、千尋の袖を引っ張ろうとした。そ
れを千尋は振り払い、苦々しい表情を浮かべたまま声を震わせた。

「わかってるよ。君が何を思っただろうかなんて、手に取るようにわかる。だから
こそ、許せないんだ！ 君にだけは、憐みの目で見られたくなかった。ずっと対等で

いてほしかった。どうしてだよ……こんなことされて……僕がうれしいと思うわけがな
いだろ！」

今までになく声を荒らげる千尋に、ピクリと紗織の肩が戦慄した。彼の言葉に、頬を
平手で思いきり叩かれたような衝撃を受ける。

謝ることもできず、ただ立ち尽くす。そんな紗織を見ることなく、千尋は行ってし
まった。

足元には破かれバラバラになったデザイン画が散らばっている。

涙で視界が揺らぐ。自分の浅はかさによって、千尋を深く傷つけてしまった。

(失いたくなかったの……)

でも、間違っていた。彼の未来を考えるなど、紗織の傲りではない。すべて紗織の
身勝手な願いでしかなかったのだ。けれど、千尋がいなくなってしまうかもしれない不
安に取り憑かれた紗織には、それがわからなくなっていた。

その日から千尋は、紗織と口をきいてくれなくなった。

さらに後日、彼が推薦を辞退したと顧問から聞かされた。どんなに引き止めても、彼
の考えは変わらなかったらしい。代わりに紗織を練り上げられないか先方に掛けあつて
みてもいいか、と聞かれたが、紗織はその話を断った。

そのときになって、紗織はようやく自分のしたことがいかに愚かだったかを思い知っ

た。紗織は、正々堂々と勝負しようと言ってくれた彼の想いを、土足で踏みにしたのだ。

紗織は別のファッション専門学校への進学を決めたが、千尋が卒業後どうするか聞けないまま時間だけが過ぎていった。

こんなふうにしこりを残した状態のまま、千尋と別れたくない。

そう思った紗織は、卒業式の直前、千尋に手紙を書いた。本当は、面と向かってきちんと謝りたかったが、うまく伝えられる自信がなかったのだ。たくさん考えて、とにかくありのままの気持ちを手紙に綴った。けれど、彼からの返信はなかった。

卒業後、再婚した母親と共に彼がパリに行ったことを人づてに聞いて、愕然とした。

(千尋くん……どうして何も言わないで行っちゃうのっ……！)

もう二度と会えない。どれだけ会いたくても、声も聞けない、顔も見られない、本当にさよならなのだとかかったとき、胸が張り裂けそうなくらい悲しかった。

ちゃんと正面からぶつからなかったことを後悔した。あんなにそばにいたのに、どうして自分の気持ちを伝えなかったのだろう。誰より大切に想っていたのに。

思えば、あれが紗織にとつての初恋だった。

苦く胸に残る記憶に、紗織は再びため息をつく。

(……千尋くんは、あのときのことを、今どう思ってるのだろうか？)

エレベーターから降りてデザイン部の自分のデスクに到着した紗織は、過去の記憶を振り切るように、荷物を整理しはじめた。

どれほど後悔したって、過去は変えられないのだ。今はとにかく、やるべきことをやらないうと。

そう思い、紗織は黙々と片づけをつづけた。

「さ・お・り」

いきなり耳元で名を呼ばれ、紗織はハッと我に返る。声のした方を見ると、親会社にいるはずの澄玲がいた。

「わっ！ 澄玲ちゃん、どうしてここに？」

「あれ、聞いてない？ 私も、新ブランドを立ち上げるため、ロワズ・ブルーに呼ばれたのよ」

澄玲は誇らしげに鼻を鳴らした。

「え？ じゃあ、もう一人のデザイナーって澄玲ちゃんのことだったの！」

紗織はびつくりして目を丸くする。

「黙ってごめんね。やりかけた仕事の引継ぎに時間がかかっちゃって。でも、こうし

てまた、あんたと一緒に仕事ができなくてうれしいわ。一緒にがんばろうね」
 「うん。私も澄玲ちゃんと一緒に心強いよ。……チャンスをもたらえたと思つて、がんばらないとね」

紗織は自分を鼓舞するように呟いた。

「そうよ。ばっちり結果を出して、親会社の奴らに一泡吹かせてやる」
 澄玲がガッツポーズをとってみせる。さっぱり美人の澄玲がやると妙に迫力があり、つられて紗織は笑顔になった。

いつでも前向きな親友の存在は、つい塞ぎそうになる気持ちを軽くしてくれる。澄玲のおかげで肩の力がすとんと抜けた。

そうだ。崖っぷちの自分は、もう這い上がっていくしかない。気力で負けたらそこで終わりだ。

「片づけが終わったら、一緒にランチに行こうよ。景気づけに色々話をしておきたいわ」

「そうだね。実は昨日からあんまり食べてなくて、お腹空いちちゃった」

そう言つて、紗織は澄玲と微笑み合つた。

ランチを目標に、てきぱきと片づけをしていると、澄玲が手を止めて話しかけてくる。「ねえ……今気づいたんだけど、その薬指の指輪って……もしかして彼氏ができた？」

(澄玲ちゃんつてば、目ざとい……！)

「えっ！ えつと〜これは……その、自分を励ますために……」

背中にかくしながら、なんとか指輪について誤魔化そうとする。

「あんた、そんなキヤラじゃないじゃない。自分を励ますつていうなら、アニメグッズ集めるでしょ」

「うっ」

契約の証だと千尋に嵌められた指輪は、外したくても外せなかったのだ。指がむくんでいるからなのか、リングが細身のせいなのかはわからないけれど、どんなに引っ張つても抜けなかった。

そのため、不本意ながらも、紗織の左薬指には指輪がつけっぱなしになっている。

まったく、憎らしいことこの上ない。千尋の挑発的かつ得意げな微笑みを思い出し、むかむかしてきた。

澄玲は紗織の手を取り、指輪を覗き込む。

「ダイヤモンドの粒が大きくて綺麗ね。このデザインって有名なブランドのものじゃない？」

「え、そうなの？ もらいものだから、私はよくわからなくて」

しどろもどろになって言い訳をすると、澄玲がますます詰め寄ってきた。

「やっぱりもらったんじゃない。まさか、これってエンゲージリング!?」

「ちよつ! 澄玲ちゃん声大きいよ!」

紗織は慌あわてて、「しーっ!」と口に指を当てた。答えを求める澄玲の視線に耐えかねて、紗織は仕方なくかいつまんで状況を説明する。

「彼氏っていうか……実は、私、結婚することになっちゃって……!」

おずおずと打ち明けたら、澄玲が思いつきり固まった。

「——ええっ? 結婚っていつ!?」

「近日、婚姻届を提出するところ、なんだよね。実は……!」

澄玲が目を白黒させている。彼女が驚くのも無理はない。つい二日前まで、紗織には彼氏はおろか、浮いた話のひとつもなかったのだから。

「ちよ、そういう大事な話は早く教えてよ。まさか行きずりの男とデキちゃった婚じゃないよね?」

声を潜ひそめて澄玲が聞いてくるので、紗織は苦笑した。

少なくとも、昨日今日出会った人ではないことは確かだけれど、どう説明したらいいのだろう。

「違うよ。えっと、高校時代の同級生なんだ。本当に偶然っていうか!」

目が泳いでしまわないように、さっき振り返っていた過去を思い出しながら言葉を繋つなげる。

「なにになにもしかして運命的な再会しちゃいましたってやつ?」

澄玲がにやにやしながら冷やかすみたいに肘つひで突ついてくる。

「……まあ、そうかな」

(運命的な再会……かあ。ある意味、とんでもない再会ではあるのよね。再会してすぐにプロポーズされたわけだし。でも、それは、ただ単に都合がよかっただけなんだよね……)

とりあえず紗織は、笑って誤魔化した。

「入籍だけ? 結婚式はしないの? 入社したばかりの頃、いつか結婚する日が来たら、自分で作ったドレスを着てみたいって言ってたじゃない!」

ちよつと寂しそうに澄玲が言う。女性のファッションデザイナーなら誰もが一度は夢見ることもかもしれない。

「う、うん。でも彼も忙しい人だから、今はまだそういうのは考えてなくって。とりあえず一緒に暮らしたいねっていう話をして、入籍を先にすることにしたんだ!」

紗織は脳内妄想をなんとか並べつつ、はにかんでみせる。だが、自分で説明しててなんだか虚しくなった。

「そうなんだ。ほんとびっくり。もう……水くさいじゃないの。言ってくれたら、まっ

さきにお祝いののに」

「ごめんね。……勢いとタイミングっていうか、急に決まって」説明しながら、良心がちくちく痛む。こんなので千尋の望むカムフラージュなんかできるのだろうか。あつという間にボロが出そうだ。

「じゃあ、今日のランチは私のおごりね。改めてお祝いはするけど、まずは色々ゆっくり聞かせてよね？ ほら、行こう！」

「あつ……澄玲ちゃん」

腕を引っ張られてよろめきつつ、紗織は澄玲のあとをついて行く。心から喜んでくれる澄玲を騙していることが申し訳なくて、心の中でゴメンと謝った。

ランチの間中、澄玲からは質問の嵐だった。なんとか高校時代を思い出して、嘘を織り交ぜ質問に答えていく。そうしているうちに胸がぎゅっと甘く締めつけられた。改めて、彼と過ごした高校時代が自分にとってどれほど大切だったかを思い知らされた。

千尋はあのと時のことをもうなんとも思っていないのだろうか……

食事を終え、デスクに戻った二人は、デザイン部の部長から社員に紹介してもらった。今週はひとまずみんなのサポートに回ることに落ち着く。

午後三時頃、ケータイを確認したら、一件SNSのメッセージが入っていた。

『四月十一日。大安吉日。婚姻届が無事に受理されました』

送り主は千尋だ。

（大安吉日とか……なんかいやみっぽくない？）

心の中で千尋に文句を浴びせつつ、左手の薬指に目を留めた。

（私、本当に結婚しちゃったんだ……）

——もう逃げられないのだと思い、紗織は何度目かわからないため息をつくのだった。

その日の退勤後、駅を目指して歩いていると、鞆かばんの中でケータイが振動した。画面をチェックすると、知らない番号からの着信だった。

普段は無視するところだが、なんとなく通話に出してしまったのが運の尽き。

『水瀬です』

聞こえてきた声にたちまち後悔した。

『今、外？』

「……はい。そうですけど」

緊張しながら、ケータイに耳を押し当てる。

『これから迎えに行くから、最寄り駅を教えてくださいませんか？』

「えっ……なんで、ですか」

紗織は驚いて、その場で立ち止まった。通行人の邪魔にならないように端に寄り、彼の返事を待つ。

『これから引越す場所を、下見しておいた方が安心でしょ。時間がとれたから案内するよ』

「本当に今週末引越すんですか？ もっと先でもいいんじゃない？」

『約束、忘れたわけじゃないよね？』

提案ではなく強制。口調はやわらかいものの、有無を言わせないという意図が伝わってくる。

「……っ」

事前に下見させてもらえるのはありがたいけど、彼の思うとおりになんでも進んでいくのが気に入らない。

（これも、社長の言うところの夫の務めってやつ？）

「……わかりました。今、会社を出たばかりです」

むっとしながらも、紗織は渋々返事をした。

『了解。あと、十分ぐらいで行けると思う。じゃああとで』

電話が切れてから、紗織は思いつき「はああ……」とため息をつく。悶々もんもんとして待っていると、再びケータイが鳴った。

『着いたよ』

視線を上げた紗織はすぐに千尋を見つけた。黒のトレンチコートを羽織った長身の千尋は、まるでファッション誌から飛び出てきた男性モデルのようだ。雑踏の中でも、彼の端正な立ち姿はひときわ目立っている。

さらっとした黒髪が風に揺れ、涼しげな目元が露あらわになった。通り過ぎる女性たちが息を呑み、ちらちらと千尋を振り返っている。

それに比べて紗織は、相変わらず地味だ。

黒縁の眼鏡をかけた平凡な顔は言うまでもなく、ヘアスタイルもセミロングの髪を適当にシユシユでまとめただけ。

ファッションもパレルの仕事をしているとは思えないほど面白くない。白のボウタイブラウスにグレーの膝丈スカート。足元はスカートと同系色のパンプスを履き、ロングニットカーディガンを羽織っただけの恰好だ。

（だって仕事のときに着飾る理由がないもの。動きやすいのが一番じゃない……）

立っているだけで注目を集める彼のそばに行きたくない。

だからといって、ずっと待たせておくわけにもいかない。紗織は観念して千尋のもとへ向かった。

（千尋くんは社長で、私は社員。仕事帰りだし、この場合、お疲れ様です……だよね？）

社長と千尋、どちらで呼べばいいのか悩んでいるうちに、向こうも紗織に気づいたらしい。こちらに向かつて手を上げた。周囲の視線が自分に向きそうになったので、紗織は目立たないように慌てて駆け寄る。

「社長、お疲れ様です」

悩んだ末にそう声をかけた。こちらまで注目されては敵わない。

「ああ、お疲れ様。車そこに停めてあるから、助手席に乗って」

見るとぴかぴかに磨かれた白い高級車が、彼の後ろでハザードランプを点滅させていた。

千尋のそばに寄ると、品のいい甘い香りがふわりと漂ってくる。

彼が身に付けているスーツや時計もセンスのいいものばかりだし、なにより千尋自身は洗練されていた。

だからなのか、ふとした仕草について目が惹きつけられて、どきっとしてしまふ。街を行き交う女性たちの視線が集まるのは、ごく自然なことなのだろう。

高校時代、線が細くて中性的な美少年だった千尋。今の彼を昔と同じ人だと考えてはいけないのかもしれない。そうぼんやり考えながら、助手席のドアを開けようとする、ぐいっと腕を引つ張られた。

「そっちじゃない。助手席はこっちだ」

（あ、左ハンドル……）

どうぞと右側のドアを開けられて、紗織はおずおずと助手席に乗り込んだ。

「お邪魔……します」

「そんなに硬くならなくていいよ。これから君の席になるわけだし」

千尋が、こちらを覗き込むようにして言う。彼の言わんとするところはわかったが、あえてスルーすることにした。

どんなに抗ってても、『結婚』した事実が変わらないが、そう素直に頭を切り替えられない。

「せっかく今日は、二人の記念日なんだから、そんなふうには拗ねた顔をしないでほしいな？ 今日から夫婦になったって、ちゃんとわかっている？」

「ちゃんとわかっていますよ。メッセージ見ましたし」

彼の顔を見ずにすげなく返すと、小さな笑い声と共にドアが閉まった。すぐに運転席に回り込んできた彼が乗り込む。

車の中は、想像以上に二人の距離が近くて緊張した。さらに彼のつけている香水の香りがして、どうにも落ち着かない。

「あの、社長——」

「会社じゃないんだし、社長はないんじゃない？」

立ち読みサンプル はここまで